

古本屋と子ども文献

子どもアーカイブの夢

学校法人白梅学園

理事長 小松 隆二

1

私にとっては、古本屋は長年の友であり、また師でもあった。学生時代から、もう五〇年以上も、古本屋とは縁がきれない。それほど古本屋からは多くの文献・資料、それに情報・アイデアを得てきた。単に文献を購入するだけではなく、主人や店員から研究のヒントや情報を与えられることも珍しくなかった。

実際に、専門の社会政策でも、近代思想史でも、また子ども学でも、古本屋で多くのものを学んできた。日本近代史を専攻しながら、古本屋にはほとんど行ったことがないという若手の研究者の存在を知って驚いたほど、私には古本屋無しの研究生活は考えられなかった。

昔は、古本屋といえば、古く色あせた本の山、それに古本独特の匂いが漂ってくる、そんなイメージがあった。しかし、今はブックオフに代表されるように、古本屋といっても、新刊と変わらない美本、刊行されて間もない漫画、週刊誌などが棚

のほとんどを占めている。古色蒼然とした雰囲気も、古本独特の匂いとも無縁である。

近年、その伝統的な古本屋では、一般的に本がかつてほど売れないという。そのため、定年で現役を退く教員が、蔵書を整理しようと思っても、簡単に引き受けてくれる店が少なくなった。引き取ってはくれても、二束三文の値段にしか見てもらえない。古本屋側からみれば、古本が売れないのだから仕方が無い現実なのである。

かつては、古本屋は、古書目録を発行すれば、一ヶ月くらいは超多忙。目録の売れた文献・項目には朱線を引くのだが、ほどなく目録は朱線だらけになった。後は休みなしに、発送業務である。仕入れたものは大方が売れる時代であったので、むしろ、それを補う仕入れが追いつかず、大変という状態があたりまえであったのである。

今は、古書目録には飛び飛びにしか朱線が引かれない。それも一ヶ月どころか、一週間も経てば注文の電話や葉書も来なくなる。売れ残りが圧倒的というのである。

また、昔は時代ごとに、必ず流行や人気の領域・テーマがあった。例えば文学でも、明治もの、大正もの、次は戦後すぐのものと、一つのブームが終わっても、次の売れ筋のジャンルが登場した。文学の後も、今度は思想史、教育史、技術史、芸術史とか、新しい人気・ブームの領域・テーマが必ず続いた。ところが、今は群を抜く特定の売れ筋がほとんど顔を出さなくなったのである。

そんな状況から、とくに地方都市では新刊本屋のみか、古本屋の閉店もあいついでいる。もともと、店舗は閉じるものの、インターネット販売に切り替えて生き残り

を図るのが多い。そのため、私にとっては、旅行の楽しみが減ってしまった。

私の郷里の新潟市でも、古町や営所通りといった中心街に何とか三、四軒いい古本屋が残っていて、帰郷や出張の折に立ち寄るのが楽しみであった。ところが、昨年夏休みに訪れた時には、その三軒とも閉店、いずれもネット販売のみに変わっていた。新潟市に近い新発田市でも、唯一のまともな古本屋D書店が店を閉じる時には、店主から私にも挨拶状がきた。努力したが、力不足で店を維持できなくなったというものであった。比較的大きな店舗を構えていただけに、残念でしかたがなかった。店を開けていても、お客が来ない。来ても出張などでたまたま来た余所者の方が多いくらいで、地元の客は、ブックオフ等に流れたのか、それとも単純に本を買わなくなったのか、極端に減った。店舗でも、目録でも顧客がそれほど閑散としては、閉店も仕方がなかったのである。

2

そんななか、古本屋で最近健闘しているのが、子ども文献だという。たしかに、神田神保町には子ども書専門の古書店もあり、それが結構繁盛している。その本棚を見ても、回転が早い。次から次へ棚の美味が変わっているのである。また大手の古書店の目録でも、子ども特集を組む例が目だっている。

現状に関しても、ご存知のように子育て、保育などのテーマに関心が高まっている。政策でも、活動・運動でも、また研究や出版でも、子ども関係は積極的であり、目立っている。以前は、子ども文献は、安定していて最も堅実な領域ではあったものの、他を超えて大きな関心を集めるなどということは考えられなかった。私個人にとっても、白梅学園にとっても、さらに子ども学にとっても、有り難い動

き・流れである。これがたんなる一時的なブームで終わるのではなく、政策でも、活動・運動でも、さらに研究・出版でも着実に恒常的に伸びてくれたらと願っている。

白梅学園では、この流れに後からついて行くのではなく、先導していく気概や実質がほしい。しかも研究・教育の先導だけではなく、私が退任する頃までには、子どもアーカイブのようなものが設置のメドをつけられたらと、願っている。それが、子ども学の構築・発展にも寄与できると考えているからである。その実現には、研究・教育の面でも、白梅学園の内部から盛り上がるのが肝心である。

最近では、博物館が資料館、それも他にない個性的なものを持たない大学は本物ではないともいわれる。大学なら、専門の博物館・資料館くらい持てということである。白梅学園には、子どもアーカイブのようなものが相応しいと思っている。アーカイブなどの創設、しかも特色・個性のある内容で創設、さらに維持・発展させるには、多くの人の協力が欠かせない。現役の教職員・学生はもちろん、卒業生や地域の皆さんなど、多くの方々の協力を得て、白梅学園でもできるだけ早くその夢を果たせるように尽力したい。皆様のご指導・ご協力も是非お願いする次第である。